芭蕉翁俳諧集　地

911.3
バ
地

芭蕉翁誹諧集中

貞享五辰年

面影程よきまつも何ぞ花の盛 芭蕉

霧の中より人ゆるす木槿 長虹

秋の雨歩行静に出る蛙 荷兮

月を見ぬ此夕をまつる山間 一井

之ゝるゝと人のやもをひらるゝよ 越人

[illegible]

故及
嵐雪

本のもとにも梅の香し梢なる月
つゝ[illegible]ぬる[illegible]
蕉
笠[illegible]野の[illegible]こゝろ眠らぬ夜
虹
[illegible]
今
[illegible]
井
[illegible]
人
[illegible]
及
[illegible]
[illegible]

[illegible]
白[illegible]
[illegible]
[illegible]
行ゆく[illegible]の連歌
のとゝさよりよ[illegible]
木[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
蕉
井
虹
[illegible]
及
[illegible]
井
人

人一代恋ゑるとふ　秋

芭蕉

虹

人

及

行

芭蕉

保

及

人

指一世ゑくものゝみとりもて
きゝなすなしと歌を詠ぜ
懐ゑ猶さ指ゝまさある
下戸をとゝめる言の葉の
月咲の梅をとる方のさとの
妻せぬ姫の眉のてゝてゝ
ちのひもにとのきなる枝の葉
物ゝきやさもる松のゝとゝ夫

此やもきゝ知をまもゝら恨ゝて
何を嘆ゝ節ゝ　やら
花ゝよる　硯のゝゝ和書ぬ
簑ゝ毛をまちの夕風

行

芭蕉

保

及

芭蕉

生ゝ
ひとつゝ水ゝなまこ氏
月ゝ月ゝ白ゝ宝ゝ菊の花
代官の竹ゝ屋ゝ月ゝて
水風呂桶の梅を入ゝ

芭蕉

徒水

芭蕉

水

敵の糟と指ふ所の小くゆ
ゆゑを知てこゝ寄をお詠
紀の時をやりし三ちの美女た
産ぶ一つまる能のをまり
多美のかゝとをる松明
松ゝ知年あゝをゝ弼
麻呂弼一るも為る本多の
中稲のあををくゆる風年
をもかしまゝよ海て月すて

水 ヽ 蕉 水 蕉 水 蕉 水 風 松

つゝをて是一鉢の五徳を
生まきて村を必ゝ寺の通
月けてたゝ此よつを紀苑淀
初花乃ゆ法なき表を越
伊賀弼のゝ山のゝ

水 風 水 風 水

元禄二巳年

かくれ家や月見ぬ窓を蛍の栗　芭蕉
待ふ間ふるまふ酒の茶の菓　栗斧
切岸沈山の外忘れて青ふかし　笋船
蛙つくゝ云ふ石の棚もしら　曽良
把の花ふ高木月見ぬ窓を　笋雲
秋しらぬ影の篠屋ぬ色ぬ次笋
ウ
樗ふ矢の羽忘ぬ西瓜を加ふ池の茶　素蘭

新米をよめる嘗のこゝろ
松蔭茶ふ次ふ見ふ多の茶
酒の色恨をいふてふ
智入ふて詠よ米てと花ふ表
さして跡きふ頃地の外
まつしきを神よふ多ふ
月出ふ山ふとうふふふ
物ふてを物ふ多ふ
笠の酒をふ苦のふ

蕉　京　船　元　雲　笋　菜　船　京

梅うもく初春や菜種の花の時
霞めるや谷に鶯鳴くなり
名
ある国とく寺とも寺もの形
此寺しめ思ひなること
まく鶯をいとる年北英く
吹えし時の鶯や言こと
こと仏の前さくとこと仏の中
林をのこる市の酒碎
此僧三社の俗とこきて

蕉良蘭躬竹蕉竹雲良

菜躬齊雲良蕉躬蘭菜

冬合まて寺時六つの
御りなる時鶯の鶯とこと
四日月をこうる宿の屋
きこうの甲斐なる里の村花
麻の高くて咲せる宮
冠をを花をこうる法しこと
こうこうて色を見を忘て
高ふ思世こうとまれて情類
義とせをいーー思ふ拾の

蕉躬齊雲良蕉躬蘭菜

合ふ門ふ法の花の色　良
蕉を尋ぬる蕉生の垣　雲

芭蕉
あつさ山や吟浦ケて夕すみ
海雲ふる成て五月雨ひろ不忠
月もさすこの夜をこの酒持て　曾良
たゝの雷ふ降る秋風　蕉
たゝて塩よやふる柏　忠
蕉の色をふふ蓑の色　良

芭蕉
次を梵天新よを髪ふ法
海原ハ乱ル形をと切せもの
松笠たくふ武限のたを
蕉まくふをの地意を忘て　忠
改の神よ所の　良
所作ふあふ形をるを思ふ　蕉
ふ北在のまし　忠
ふ北籠の考　良

月

ゆふし給とて三月廿七日人良
加ゆきの花ちる風と蓮
曉の物さん寂さうの月
相ゆきの木枯よひくまの風
姿さう滝ゆきゆる山姫
別れの磯つまゆきう笹伊ひ
榊をきさひる墳の阿蘭
初雪ちうゆきを粉ん
えひまれ良磯くうなく

蕉良むゝ蕉云むゝ蕉云

望しあん行を俵よ生きて
月さ（ときき陳中の市
俵興をきう蕉の恵よ酒ゆ
小袖袴を弥う成の師
横笛の田よ似うし床しく
多ゆふい阿ゝ数ちうしきを
さふ良の京指ゆきゆう古今集
花よ対をゆう恰の酒蕉
蕉るの菓をよゆる羽ゆう良

蕉良むゝ蕉云むゝ蕉良

聲絶ずに飛く節のまゝ　巳
錦木をはくらしたゆたえとれん　蕉
ちからなうてもなさむ言達　良
ぬけそむる人ともしらず秋の秋　芭蕉
落かゝれるをみるふくかな　云子
月つんとて猶ましもす船出て　曾良
千ぬこの言をも浮ふらぬるなり　小枝
壺の風をも鎌のみあのいさめぬ　コ蟻

轡をならして馬此一もと出　志格
日をへする湯山の峯と幽寂　斧卜
下とりよるもて言ひ酒樽　塵生
鶯のなきし餞をちまれをり　李邑
名の池落り枕かくらや　祝三
見つ隠も鳥此声とつましも　夕市
鼓をすむる空ま輿の船　蕪
肌のえひせのかをしてまうらる　招
ふと盗まれて我かくて船出　蟻

よるひるの木よりも降もさたまの声　枝
雷上ふ清志ふ浪ゆり　良
世けためを此の柱こえこゆし　子
胡瓜すゆる鉢志おきの月　芭
秋とれのう雲には哉ら也加まあ眠な　市
ひのしを懸は　月の住情　卜
蕣葉て芳茎よ糸つく里を也　生
鮎くるふ霜もちとふけり　三

ゆかりて燕返ゆく足へれ哉　小枝
花やみをこし山のまのり目　芦良
月よし空お櫻よ梯路ぬるて　芭蕉
鶉たしかしとやそ岡をは　枝
ま澄りよ桃のふれても水の音　良
栗のうこらは峯の笹をと　蕉
雲霰ふる言ひの山は草のち　枝
持甚女田七人田食をもらひ　良
旅半青よ急しさて野もの名しるて　蕉

贈与制○かと寅冷めなく
茎北いとやこうとゆく亂ふき
生え花の多天をつくくるる門
有明の桑の上堂かくくれよ
古詠まつくくる嵐のこう牛
秋をせくくよ山をぬるし湖
白紀詩堂法くく蕪礼
色の多い古紀都の町つくを
まくものこせる玄仍の茅

枝 良 蕪 枝 良 蕪 枝 良 蕪

のくくやこうく瓶陸の貝を
紀の小鍋をくくに芹焼
よ花下をくくの扶ち挿
茅くくのくく亥面
くよ小袖蕪ふくのた風
北亥人形冨人の菓白
暗一ツ亥よくくに林さよ
ミにくつくる三月の孫
初茅心茅の花よ酒ゆ

枝 良 蕪 枝 蕪 枝 蕪

小扇書たる 俳諧の秋風

疱瘡ちる菜名日涼しきを

百ちりくとり枇杷つるなり

弱七夕仙女の袂ぬぎやうた

あうねをちちる水のしら波

仲綱の字佐の河波とうち流

寺よせを立る口上

鐘撞て惜るん花の散かる

破くるいてやらい等ゆく

執筆 蕉

牧

蕉

陶器ちちゝ 毎日料理は瓜茄子芭蕉

うきまゝて 梅の日の新 一泉

月よしは 来る次く 左任

蕉 遠ちさ 蕉 ふむの世恒 ノ杯

陶器佐の門をなつて 椹の音 竹意

小楠忠清の孫 ふ 昭 乃 流 語子

七つよる 世長せし 焼の忠 雲口

ちちちやる 孫 北 東 京 乙州

清 ふ 新 よ 乃 あ こ 地 く 如柳

小枝
雪花
流志
泉
蕉
枝
口
流生
良

いさ子共をもとはせうと思ふ蕉
杉菱子共をもとはせうと思ふ枝　水仙　良正
初笠は見やむ行よ迷まねて　枝風
花をまひてもむ月の小道　園
鹿の杉蓑の加茂の名なる　玉芳
さらさら蓬の岸の葉の葉　史殘
雖双鹿おそ形ふこよ折折　品
ものくふくちもん蝿のくるさ　蕉
常ならう賛計四引雪海　雪

世うきこゝろ月よ面影も枕
ゆめ紙ちの乱くゝり巣かゝて
袴をゝゝてゝやわの乱くり
る此旨傳ゆをものあゝくゝ
月入ゝ面をのいゝし事
秋風の笹ふるつゝをゝ出て
簫ゝゝをもる萩の山夜
へゝをゝるゝゝぬゝ花の笠
ゆ越揃へてまをの年ゝ

風孤　蕉　正　園風　芳　蕉　正

秋立て新屋敷をうち休め
首の一ゝゝ形　紅の玉簾
初雪ゝまつ下の句をもり茶
ゝるゝ多ゝ面ゝゆの宮
茶せゝ君の辛抱ゆゝ住こゝ乳
林をゝ出て陸ゝ清水の戸
寝ゝゝゝ別をゝゝを記録の旨
風狂仕上ゝ国天下此ゝ子
世の中を機嫌ゝゝゝ旅ゝゝを

風孤　蕉　正　園風　芳　蕉　正

よ記ろんれい佛さうらく　珎
陽炎も月とくらし如くこ　川
借忠樫利魚の夕まう　置
女房忍なるまゝ嫉ゝやと踏あらく　蕉
色こそ浮し水し畔よ泊るる　風
すゝしさて蛇も呑ぬも気の柴　凡
向ひ地なくよ初子かへる　芳
左義長の暖きより花をまつ　珎
なかのよし雪千里さまくる閑　園

元禄三年午

此木の芽ともえしら浪白ひら　芭蕉
こゝろよ鮓を食むしくひを　益光
麦海記柴の橋より雪掃く　又玄
二筆ふのをらし伊勢まちやり　雲鈴
有明の忠紙を結よ引つゝみ　探丸
初桜もなくなる坂の御み火　清里
物柳よ嵐のかまふ雪かすて　之

門田の稲の中の寺　蕪村

山路来て何やらゆかしすみれ草　芭蕉

わつらふ人の聞くやうはさ

世のうき比の鶴の声　芭蕉

春は曙そろそろ山ぎわ白む　正人

いなづまの光に照らされ

陳の加茂より清水の方へ　光里

ちらちらとのぞきて石を踏ぬ

ちらめて降る雨に猫

酒月を踏のぞく孤ら窓うそ

蕪村

蕪村ちらつく雪ふん

神垣やとぶきぬる泡の間

芭蕉

夏欲しはまぶきぬの俤

こゝ元まとゆのあやめを折るて

水鶏を山の鶴　晴

為てこすゝ鶏北窓のうゝ

誰の立ふるの雨

あくるゝ楽は一ふを聴て

玄人　延玄　高　巴　蕪

物思ふ北風さえ渡り
聲立て義経秋の隙
しくも風に紅葉ちる
笹のけく夜毎の月をつゝみ
ふとゝぎす聲も鶯の宿もきく

ウ

新ひとり菊よりぬる紅水と欲る
まゆ月初瓜を茶に代なる
此城を部ひきゝ夜ひとつて
思ふ心櫂に

玄芝　延人　啓芝　蕉芝　正永　玄

ものゝ如の弓張に花を引捨め
経尺の宮神垣の春　延人

鼓ふる花の経新ふる影　芭蕉
せめて涼し夫なるのまゝ　奇香
初月の新芝繁りさかえて　尚白
石上いとの新しなるなり　自笑
春の雨を秋風さゝ過ぎくよ　通雪
冷やゝて琴の糸より　松月

このしろ世となりて日を積る　香
矢数て碗のよろこぶ　蕉
古塚よ古郷のよろこぶ　笑
梢の蕨ろ言とかしまま　雪
まくさ蕨ぬ先より出て蓬粉　冥秀
俗世の外恋清水ろく寺　白
崩ふくとろろとくろ月二ろ　洞
杖よまくらよ芭蕉の寿　江山
稲書よ時く社おまきて　蕉

横ーまれ為汗て恋ろく
花ろんて吉野ふん原上砂きや
雨て肥ろ山寺のさろひ
書めーよろまくろ友ろん
さきてろ言よ延の書きく
恋ろ夫北恋よろ杖の桜
生よときろ為永のむく面　官江
ごん恋ろよく恋ーき恋ろ基　一龍
恋ふ高恋の子後捨てなく　蕉

笑
白
香
雪
山
香

中の秋淋しき世を送せり
三郎ちゝ　萩を踏れ
ゝ紀人を送てゝ送る月のあ
大幣ゝ送て　桂子　ゝゝ
一条や二条あゝゝゝ小袖を
夫のゝ告沢　比叡の山風
こゝゝ雪ふまゝふきて千鳥哭
遥原を尋てこゝゝ　時雨
碎ゝ時ゝ伊吹の嶽ゝ　こゝて

言香　必香　洞白　江言　香

都忠　妹のゝを　屋てゝ
機ゝむ　書ゝ　花の香を　焚て
ゝ紀夏ゝ　ゝのゝ

就　蕉　白

髪ぬく　枕ゝ　ゝゝ
入日　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ乃　ゝの　ゝ
前ゝ　ゝ　ゝ　こゝ

翁　遠　陰碩　蕉　遠

春の小ぶねを漕ぐ音も
所もとく一色に
顧ぶるふ立ち
ぶ織の帯や英しく照とめて
久しき紀の
山ぶるの北門の吟ぶる初あし
加ぶ立ぶ踊り踊けぶ
月新ぶ実の芦毛を迎みて
朝ぶ立ぶ踏ぶ

頑石
菊翁
道
左
芝
左
翁
芝

ぶ北ぶ立ぶ
又し沈生の立紀風ぶ
吠くぶ立し吠吟ぬ新角
立立ぶ

頑
菊翁
道
左

雲や雪をすぬ紀ぬ〳〵霧の月　園風
ぶぶを紀ぶ梅のぶぶ紀　梅額
磨ぶむ人なる紀里に安ぶて　羊孫
かぶぶ杜月の立ぶぶ紀　ち芳

孫子言留まんち里ゝ迄
枝くたち跡を迄まる
夢孔子志を留馬恵義之
世ゝる此の戸のゝち
後鉢の夫の北鎌を砕とて
背中いとく張ちゝる
しゝる龍の中高まる
まを乙ゝる猫澤の魚
寄あと皆くゝ馬恵ゝ如ゝ

風 麦 不 芋 蕎 豆 額 刀 白

なゝとゝや鉢の代恵
七夕ゝきとゝる深ゝき
家高て世を何ゝ如ゝ月
柳の木の枝したゝゝ夫と
死てすきまゝ ゝや麦高
波り志の踏迄ひゝ家つゝ
小牛の日とゝ つゝむ村と
高の川あゝ立ゝく峠まん
麦を一本山恵 神ゝ

鉢 風 蕎 麦 芋 額 白 鉢 風

を合して花よ美しき夢すらし　蕉

雑々紙に認めこそいるる　芭蕉

まつ毛よりしたゝる露のおもくして　芭

思ひぬるうの花おもとつむ　支

このころを大和と物思ふ花の品

あぬしのまて路の芝とも　白

門うつ音蕭の陽よおもこゝろ　芳

月の座　拭ふ世わ多氣　凡

月のおもこのうしろ　蕉

碓うちし　高のいさゝひ　カ

蕉ちりけや小野の里の苔　百策

笛の音水る　晴の松　式之

一ふし詩の夢　寝て　芭蕉

雨ふる　冬牛　田畑ふる

蕉の名とあつ　ん月村鼓

腕お　流き　古紙の元　梅市

若殿の宿の中の大ふる　梅窓

京の小行灯と宮ゐうし
提灯をともせと云ひ 隆つ者
紙子羽織をきて白をせ
浦くとを見ゐ小人人あ書て
左記名深き家をくる記
きの飼おく明ゐ紙をかせ
一つ足ちぶまる山の秋
ゐ宮のきぬを祇てうせる
祇ゐ清三郎も次しらふ

蕉
牛
を
歳
市
数
蕉
を

杖つゐて上色い婦ゐ花の論
宮あくこのゐ 味 ○ をくう
名
まちの墓て猿ゐ小説を商せう
家公廉の廉風ゐ画かり柳子
西新ゐ ちつまくう唐(雪)
根名のく屋を番風ゐをを
をちくをを敬のを此する風を
むらかふ花蕉くを也く
岩蕉の市の海を風買て

都
家
数
家
蕉
牛
を
数
市

昨日の清遊乃月見時雨
稲妻あと雨漕ぎ出でし
夢の清遊やあらぬ彼
ふるさと伝ふ家を軍云て
手本のいまよりあるべき棟札
枕衣の下知の長烏帽子むけ
菊を志ぞ笑ふ
鶯ふくまよふ花の色なしや
烟ふる行よ西の市

之
数
冨
意
之
家
意
う
市

初ふるの射場やあらん弓捨て
澄て生すまし一ふさ
冨
数

半日を神を友や年暮れ
言よ古民の供物
水ぞふる芦のあけ京鶴帰て
雪のあるとるたを梅の吉
なまじよ初りよ月の紅人
秋よつなぶる恋の杜
菊
示右
化物
吉来
景楽
乙羽

実入る紀国紀の川田あるみく史部
里ちるなる一るも見あると玄哉
押しつ言おくもくあるあ鉢太
まかと出る僧の首途蕉
白川や雪ふのちをみ杖主
右をたをたを荊棘咲ぬ九
洗濯よやとるし あるく殆業 孤
猫のいをも此声も恨めし 九
上を上下ハて物ひ蕉

みな日張の袖なるる
高熊人よ公不とこ月を好表
まの海をよ朝ゆ焼
名
ををを寝ゆ行
面ふしかを面ふなり 鉢
茶屋よ陸つのあるる 海
日をかをへるを加る能をを 末
くるを服紙おなる九十な 九
おをへを蛍火 蕉
右 哉 蕉

冬なる富士の雪ゆゑ白たへ
禁忌里のおてら　意一き

首とらうとへきの北鳥嶋
野中の狐の有しみ

月夜く小石とぬると石地蔵
世ハなる次第芋焼てくふ

萩をみて蔦をまあ家建て
隣の家まねしてくるる新

なくしし小さ紀を誌求る

邦　兆　右　春　邦　兆　蕉　太　東

多年ハ形のうつろふ風のこゝろ　北
高句ハ花表をとゝむ花豆　九
西陣ハあらうらのわたひ　杉

之祝日来る

ひらくと揚る扇やそよの栄　尚
まゝ花ハ地てゝ夕之の紅　安世
涼を以房を為ほとんとて　支考

ちかきてかぶとを生ずる事中
月の欠所の物ふるふるまる　古歌
大きなる虫のなきを物へなく　丹埜
傘をさしたんて歩る秋の雨　芽
言葉半分人を待　菊
きつちりと物をふんで連を待　世
夜の明るやらしらむ涙雨　考
ふるふる分る別して　聖
其向の風を影を吹　芽

ちる紅葉むらさきみる猿のうへ　菊
うく江戸の草紙の事　跡通
ふ所を引ひなの花ぎれ　、
ちるものるまる枝ふしらたく　○
月花を紙の宮をかしこまり　○
あちらこちらを猫さまをやく　聖
石垣をたまをたまをもる　、
有よりの伸るる時をつる　○
こくめん形伸るるふるふる等　○

至踏出しこゝろいかるいかるゝ
頃常よりはるかにきみく穴うあく
名別の町の辺分をとる
明月北鮮よりあくるゝ実東子稲　業文
ことをいのゝ丁るゝ所ちむら
芦蒼をたつゆゝとゝる秋の面
いけ作るゝも詩を上よなり
世界をゝ笑ひぬ芦陸して
屋を武士ゝ二月をへとも

○○○○○○○○

ちよ品の芦山をゝ杖切り
田の京ゝよりやる面土坂離
数の屋をいをゝ北ゝをいるの月
酒一ちとゝををて吞ゝ
病ぬいて白ゝまあなゝ必ゝ
ゝちへ むくし京いゝんゝ

○○○○○○○○

炊ぐ千代幸ふ雨乳乳　及府
敷居ふまえくゝとゝす月　陰頃
早稲菓とすくゝ住まい　之道
人もしとよる辻の祝師　昌房
膳棚きもし　くゝ四全族　正秀
をつとつふし　ゆくゝの風　探志
簪指くゝ祝のこけらを指ふん　頃
をきる　ひとを　髪をきるを　道
石をくゝ雑炊時の夕まくれ　房

神写みる姫かゝやもゝ
拙ておくゝ今月のまゝ山を
明をくゝ牛物をくゝ
月の家庭ゝ也ゝ迫かつゝ
菓をまくゝ也とものやとひ人
上張1鈴ぬすむ月の信
日動ゝもきゝ京の紀明
くゝ板板ぬくゝ芝生
芝ひつまくゝまくゝの入芝

秀　道　水　秀　志　房　房　頃　芝

帰庵より砂川まで七里半
相模を後ろに諸手を引
行きて紅葉なり十六日
茶をやすむ冷飯の味
毋紀丈仕立てんを嫌ふ
意ひしもる極を形山ふし
江戸庵を持て生涯の門出へ
妻を前ろ者と一個の旅なし
殺刀の刃を盗まをしらせて

志
斉
芝
翁
頑
道
志

斉の小高き丘に生おふ
ちんくと風ひの除を庵
て後を生る秋のひよろ
山名忠本陣色佐く風の旨
石地の坂を降るうら坊
情流き泉井の大二影て
加紀を孫に赤良の潜上
跡の庵き多く花と枯ひ
加らくとする者のあり日の

斉
秀
斉
翁
頑
道
斉
秀
形

繩なるぬ初秋の　日和の那　去来
菊ふくふく帳ふ北斗敲　菊
小灯をさげぬ二階に抹茶て　路通
ひしひしと寒の鳴　丈草
一通ふ人を思ひ出る　惟然
ちちそろ〳〵ぬ背中ちる　去来
折明くいそ札ぬ人を思ひ出る　菊
ふ水つの泣りもふ西のみ　通
地図のうをもうを花を　卅

風抜ける芋の小さうな
夕月寒炬燵後して立地を
泣ちちかをするこ女のさき
石佛いつ化ぬ小ちをを
牛の背ちく牛化らたや
酒の徳教へ上ちを酔ふ
宮寒小路下駄あひて
陸奥を花ちり月の極くよ
唖寒小ちのしく寒

然　去来
菊　通
卅　然
来　菊
通

雑を記さんとほりうまのゐ
ゑ小ゐ下しもふ老菓
物を誘ゑとうゑ殺出て
疹しくとる詠のやまよ
作笠法拾ひ沈先此古美復
あす他らふと言ふなくゐ
供ゐ白くつ生て心哭の弱なり
畑の中ゑ三度ふ稲は乃
麗井不態迄不生月枝

竹 統 主 為 通 並 統 主 為

杉 別 殺 巻 の ふ く め ゑ 詠 ま き
や ま 氣 ま ふ 加 ま と 殺 ま あ
沛 簾 の 外 西 ま な る 為 竹
子 知 こ ろ ゑ く 写 ま 通 ま ら
畑 の 中 ま 杉 ま ら す ま 稲
こ ゑ ふ 詠 し 作 側 を ま ま 拾
合 巻 は ま く 芦 笠 の ま
伊 ま 加 ま ま 北 笠 ま ま る
芦 ま ま ま 髮 の 白 記 嘴

通 竹 統 主 為 通 並 統 主 為

月見する座にうつくしき顔もなし　翁
庵は柳のまふ蓑虫となれし　尚白
火桶ぬる窓のよ際にねしそ　、
別当よりふるき枝持来　翁
尾かしらのめてたくそりつる塩小鯛　、
百歩し見ゆる川の水かさ　白
寐覚やくる人なき草枕　、
雨のくとりよ豆設様させぬ　翁
こむしろなくれて膝る節の末　白

這のこふ子の飯つゝむこ　翁
いそうときうしゑる油筒　白
袮ふとふまれて別ゑひて　翁
月の前たくてもひる庵の北　乙
桔梗かるゝやおすゝめの虫　翁
信発乃髪を茨乞よ結て　乙
大工の棟をいのる千之言　翁
三石の穂ゝやとしふ荒ふさ　白
八っさのうちまもの叩降　翁

行くる白根よりと北麓にて
折ふるこゝろまもなく珍敷
高人来給へるさまる孫枝
とりよりとやくるいとゝ敷
蓮の葉ゝ高き波を流せぬ
暑氣よりこゝろ月の詠地
蜩の葉ゝ高き玄冥書
高きこゝろ多きとき行り
蓋茅屋仙よ夏の葉ふ向の風にて

白
菊
、
白
菊
白
菊
白
菊

陸奥国白小のこゝる月
こゝろの地よりとき八一里ま
さゝ雪ゝるる紀の邪
面切の世ゝの中の葉風
小菜ちゝ蛙ゝ遠ゝ
蔵高北やゝ時ゝ日の暮ゝ
多くゝ行て陸奥の菊
高明て花ゝと月の葉
折ゝ地ゝ

白
菊
白
菊
、
菊
、
白

の百屋おのゝ一くさ折つれて
日ぐるまでまつる笠よりの脱
尼をそなへ初つるをそなへ帰
漁水をたて胸をさゝもも
隠家をとゝ静なる猪田の真
鹿の杖とゝ流つるを杖明
むさくるをたゝ敷地を月をて
名残をとゝ世をとゝ庵を
ちのゝ和北笠を書仕給

秀子　房江　菊　房　秀　志　吟志子

人を為めゝ加ゝ尼猿之
お弾を男右弟のまをいすを
おをゝ所ゝをゝ法華おをゝ
一振おんをゝ西ハ紙ゝの
浄瑠璃やめて説弾をゝ
風節ゝ仆をゝ所を次ゝ
馬ゝのをゝと徒を加ゝ
近ゝ蔵を白ゝ生ゝ乱ゝ
海ゝ人へをのゝ

秀　房　子　房　江　房　菊

やれ〳〵やもてゆきよる月のさま　翁
舟をたのゝてゆくゝ沢の水　成秀
ゆゝめなて咲と探るあ秋の夢　流通
湯こゝけする者乃せゝ　丈竹
ゝゝと眠きいなるかるの砂　惟柱
惜よう酒をれ夕立の新　格睦
ウ
ゆゝ月ゝ月ゝ別る細のゝき　正則
石のるゝ山ゝ雲ゝ生ゝ　楚江
鶯鶯の家をゝみてきゆひり　勝重

食はくゝ日ゝ時ゝ日ゝ昭　等春
拍子ゝ拍子ゝ拍ゝ消ゝ遠て　兎巻
滝を流ゝ谷の大井　正秀
月新ゝこなゝもゝる四の上　則
ゝゝゝゝゝゝきゝ沢ゝ　重氏
秋こゝを待ゝ秋を折ゝみ　重古
ゝゝ北白ゝゝゝゝ　菊
年ゝの変なゝひゝなの新　美
ゝゝるゝゝゝゝゝゝの日　刈

書北窓の下に茶を吹て
さくやうに事はもろはなれ　正章
なるまゝに書ちらしたる
いくらは山に流るゝ水　江
汗嗅き人かなしさを忘れ　苓
せめてたましゐ焦なさま　香
風やうに流るゝまはるゝ舟　然
只一ちに打む涙ゝの　秀
をゝしたる都の花盛り　通
紫葉

月に人を南にやうて流るゝ　草
秋をゝ河の岩やく石の亀　苓
雲ゝる糠の夕アさ哉よ　睡
汗拭なるゝ行ゝ流さ拭の　通
方面は大戸はそる月とゝ　定成
長柳に紅ゝ葉ゝ　柳流
おゝきに咲て拭ゝ咲ゝ　秀
職人の只あゝもる花の陰　徒丈
南北とゝめゝむ若葉　秀

うりの花稲の穂の穂の穂の穂
石もとをの清水滝池の水　昌房
白雲のうちより出て　菊
風烟の火をとらふ夕月　正秀
たのまれて銀杏の葉をかぞへ　地徑
をうつして乳をうる物の子　乙州
閑寂をうつすうる影を見　麦好
あい岩壁と出て情うし　陳頑
玉ゑ清きまと秋とぶ空沢　整子

金掘よ入る洞のうちより出
田の中よいくつも鶴のうち並ひ　里東
芋花の札の米　探志
山嶽よりとかる花の白雲の流　游刀
秋雲よりとかる芋の花ゑ　秀
月新の二階より清をつぎ上て　面
芋麦の匂ひよりもをて下積　好
湯ゑや海よりの花の生ゑ　東
東風吹ちをる菊水の清　刀
　　子

名

鶯は梅のなつかしんで
百度上るよう揚て宮まつ
みの義理を語て泪を
思ひ出せば梅の姿
ますます書もふる紀貫の
潮さしまする月の廻廊
小の古詩思ひ出せば
らはおのづから
ひとへまさいみ孫まで

秀頃
好子
品
於

為
好
任
百
刀
序
子
頃
任

心髮さしも次に序の伺せあ
おもまきに家所屋を拭立て
夜の百を迎る此の子の隙
文まつ三史文選
世祿たしやる是のまま
押へる風を孫を
筆使ふ
内業
燕の

こゝぬなとふくは時雨に菜の尾根　斜嶺
火をとりつ番に気のしくひもち　如行
一夜の仕る〻妻によそきまりて　芭蕉
垣ゆふ舟を作し廻をちり　荊口
打連て弓射にもる有明に　文鳥
山雀籠を提る小坊主　此筋
ウ
秋風に陽みけれと此長囲炉裏　左柳
思ひの人を草鞋てふむ　洪風
蝙蝠の塗破りしる床笹のへ己　竹戸

念仏の声しる御しぬゆる　路秀
わかまんとつめさ袖小袖あさえて　千川
をきさ取きともせん恋のあまな袖　蕉
無ひ信夜留守乃表なる戸をとまり　口
米養さしては此男に仍　巌
鞍あるを馬る奥をともひ　節
涼しさ月此さへてもの〻　如
初花の京まて落をさまれて　蕉
同利にまちうと乞ても世ぬり　枚

芭蕉

白雪

梅嶺

蘆角

支考

以之

扇車

洛水

梅先

梅後

桃雄

言九

言

芭蕉

水

考

之

先

おとしつき玄哉の中はこそ尾花
小翹ゝ鶏ゝと山ゝ色ゝ
玉清の清ゝ雁の声連ゝ
面ゝたふゝ月の光つゝ
籠つゝる側よあふ形く目を遷
杉毛ふ丸坊少ん若ゝ湯ゝ
雑ゝ帝を兮ゝ負ゝ柿の供
吾ふゝこみてゝふし鳴ゝ
にこゝとさ花浮雲の美学ん

石 隣 後 九 鯉 蕉 隣 考

院し白髪をひ形ひ色
やゝゝゝ鶏ゝ帝ふ沢夜の月
供ニの花ゝ下ゝて指ゝて
あのゝ山ゝ新酒ゝ
ゝ粉ゝ門 岬下 垣
ニゝの道加ゝ一ゝ
龍のゝみゝ小 悔
笑花ゝ柳ゝの
むらゝゝんて肥ゝ松

ウ

俳 九 蕉 ゝ 石 先 雪 車 水

芭蕉翁俳諧集　中巻

昭和學園
短大
第 6367 号
受入
昭 36. 3. 14